

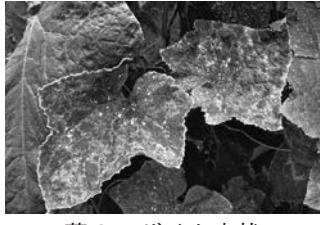
**きゅうりのウイルス病を
秋作に持ち込まないために**

きゅうりにウイルス病が発生すると、葉の黄化などにより生育が抑制され、収量が低下します。

秋作は、ウイルスの媒介虫が発生しやすい環境になります。そのため、秋作にウイルス病を持ち込まないよう、春作の栽培終了期に施設から媒介虫を外に出さない、また、秋作時には施設に媒介虫を入れない対策を行うことが重要です。

1 黄化えそ病(MYSV)

黄化えそ病は、ミナミキイロアザミウマが伝搬します。黄化えそ病に感染した植物に生息するミナミキイロアザミウマの幼虫がウイルスを獲得し、成虫となって健全な植物を摂食することで感染します。なお、一度ウイルスを獲得したアザミウマは、終生ウイルスを伝搬する能力を保持しています。しかし、



葉のモザイク症状

卵を通じて次世代へ伝染することはありません。また、管理作業による汁液伝染はほとんどなく、土壌伝染や種子伝染はしません。

2 退緑黄化病(CCYV)

退緑黄化病は、タバココナジラミ類によつてのみ媒介されます。きゅうりからきゅうりへの伝染が、最も可能性の高い伝染経路と考えられています。ほ場、野生生え及び家庭菜園の感染きゅうり株が感染源と考えられます。成虫や幼虫が感染株を吸汁することで保毒虫となり、数時間から数日間にとわり、ウイルスを伝搬し続けます。なお、汁液（接触）伝染、種子伝染及び経卵伝染はしないと考えられています。



下位葉からの発病

3 モザイク病(CMV、ZYMVなど)

モザイク病は、アブラムシ類によつて媒介されます。虫媒伝染以外に、整枝・摘芯・収穫などの管

理作業にともなう接触伝染や、ハサミなどによる汁液伝染が主な伝染経路です。いずれのウイルスも、種子伝染や土壌伝染はしません。



※画像提供：埼玉の農作物病害虫写真集

4 ウイルス病への対策

(1) 「出さない」

アザミウマ類、コナジラミ類が発生している場合は、栽培終了まで継続して防除を行います。また、栽培終了時に施設から野外に媒介虫が飛び出さないよう、ハウスを蒸し込み、媒介虫を死滅させましょう。さらに、ほ場周辺及び施設内の雑草を除去し、媒介虫が増殖しないようにしましょう。

(2) 「入れない」

施設の開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットを展張し、媒介虫の侵入を防止しましょう。破れた箇所などがなければ確認し、ある場合は補修しましょう。また、粘着トラップなどを施設内外に設置し、媒介虫の早期発見に努めましょう。

ハウス内環境の「見える化」できゅうりの収量UPなどを目指しませんか。

ハウス内環境の「見える化」とは、「温度・湿度・二酸化炭素濃度・日射等」を測定し、環境変化の推移などをデータ化することです。

「見える化」することで、例えば収量の増減要因を分析し、次作に活かすことができます。これを積み重ねることで、生産者ごとのほ場環境に適したきゅうり栽培を行うことができ、①収量向上、②病害発生抑制、③水や肥料などの効率的な使用、④管理の自動化などの効果が期待できます。

※「見える化」するためには、各種センサーが一体となっている商品や、温度・湿度・二酸化炭素濃度などを計測する機器の設置が必要になります。

大里農林振興センターでは、令和元年度から「環境制御技術に関する研修会」を開催し、様々な情報提供を行ってきました。ご興味やご質問などがございましたら、当センターまでご連絡ください！